

「にっこり」の高温障害軽減効果の実証

要約

結果枝の高密度及び基肥の増肥によって、外部の焼け、果皮障害及び内部障害の発生程度に差はみられなかったが、水浸状果肉障害は高密度＋増肥区で抑制できた。

○ 展示のねらい

なしにおいては近年、夏季の高温が起因と思われる日焼け果や果肉障害が発生している。特に「にっこり」では、令和 5、6 年に本症状により県内各地で多くの果実が廃棄され、同品種を栽培する上で大きな課題となっている。

そこで、結果枝の高密度化及び施肥量の変更による果肉障害の発生軽減効果を実証した。

【展示内容】

試験区	枝密度	施肥量	処理内容 ^(注1)
高密度区	1.5倍	慣行	・結果枝を1.5倍の高密度(4.5m/m ²)に配置する。
高密度＋増肥区	1.5倍	1.3倍	・結果枝を1.5倍の高密度(4.5m/m ²)に配置する。 ・基肥を1.3倍に増肥する（N成分で26kg/10a）。
対照区	慣行	慣行	・結果枝密度、基肥窒素量ともに慣行で管理

○ 主な成果

表1 果実品質及び果実生理障害

処理区	果重	果色	糖度	果実生理障害		
	g	c. c	%Brix	水浸状	みつ症	褐変
高密度区	816.5	5.4	12.5	0.6	0.1	0.0
高密度＋増肥区	797.6	5.4	12.3	0.0	0.1	0.0
対照区	800.6	5.4	12.4	0.2	0.3	0.0

注 1. 全農作成梨にっこりカラーチャートを使用

結果枝の高密度及び基肥の増肥による果色及び糖度に差はみられなかった。また、外部の焼け（日焼け）、果皮障害及び内部障害（煮え果）は処理による差はみられなかった。一方、水浸状果肉障害については高密度＋増肥区で発生がみられなかった。

○ 今後の方向性

にっこの水浸状果肉障害軽減効果として、基肥窒素量の増肥は有効である。生産現場においては県の基肥窒素量より少ない施用量となっている事例もあることから、適正施用量の遵守を促すとともに、発生が多い園地においては増肥の推進を図る。

なお、側枝密度についての効果は判然としなかったので、次年度以降も継続して効果検証を行う必要である。

実施機関： 那須農業振興事務所経営普及部 実施場所：大田原市
問合せ先： 栃木県農政部経営技術課技術指導班 TEL 028-623-2322 FAX 028-623-2315